

異世界に飛ばされたら
愛犬が
獣人の王子様になりました

大和ソウ

【登場人物】

- ・伊藤紫織（シオリ）

新米社会人。

両親を事故で失い、傷心していたところ迷い犬のレオンに出会う。

以来、レオンを家族のように大切に想っている。

- ・レオン

紫織の飼い犬。大型犬の雑種。

その正体は———。

「レオン、ただいま！」

玄関を開けると、クリーム色の大きな塊。愛犬レオンが「わふっ」と吠えながら飛び付いてくる。私は大喜びしているレオンを抱きしめた。

「こらこら、分かったってば！ ごめんね、遅くなつて」

興奮しているレオンをなだめ、一緒にリビングに行く。仕事終わりの午後六時過ぎ。決して遅くない時間だけど、大切な家族を長時間放置するのは忍びない。

「今日はどうしようかな……お魚があるから、食べる？」

「わんっ」

レオンは嬉しそうに返事する。本当は違うかもしれないけど、なんとなくそう感じた。

「よしよし。じゃあ、ちょっと待っててね。すぐにご飯作るから」

レオンとの出会いは数年前に遡る。当時私は大学を出たばかり。両親と一緒にこの一軒家で暮らしていた。

特別なことはなにもないけど、幸せな日々。けれど、それはある日壊れた。

一緒に出掛けていた両親が車の事故にあった。大型トラックとの衝突で、二人は即死した。

私は一気にどん底に叩き落とされた。そんな時に出会ったのがレオンだ。

当時の私は抜け殻みたいに生活していて、両親の死から抜け出せずにいた。

行き場のない怒りと悲しみを抱えていたある日のことだった。仕事の帰り、道端でうずくまっているレオンを見つけた。

レオンは既に成犬だった。脚を怪我していて、道端で苦しそうに横たわっていた。

鳴くこともできず苦しんでいるレオンを見て、私は放っておくことが出来ず、動物病院へと運んだ。

幸いなことにレオンの怪我は比較的軽いもので、血は出ていたものの、骨は折れていなかった。

レオンは綺麗なブルーの首輪をつけていた。宝石のような飾りがついた、とても綺麗な首輪だ。それに付け加え、ツヤツヤの毛並みに、青い瞳。多分飼い主はお金持ちだったんだと思う。レオンは誰かに飼われていたようだ。

でも、レオンは生体としての登録がなく、警察に聞いても保健所に聞いても飼い主は見つからなかった。

多頭飼いしている家が捨てて、そのまま大きくなったのかもしれないと獣医さんは言っていた。そして、このままでは保健所に引とられて殺処分になってしまうよ、と。

私は両親の残した一軒家に一人暮らしだ。犬を飼ったことはないけれど、両親の遺産や被疑者からの慰謝料もあつて、お金には困っていなかった。

そして、なんとなくこの子が放つておけない——私みたいに一人ぼつちになつてほしくない。そう思つて、引き取ることを決めた。

レオンとの生活は楽しかった。両親の死で落ち込んでいた私の生活を一変させた。

引きこもりがちだったけれど、レオンの散歩で必然的に外に出るようになったし、こうして生活のことを考えると楽しかった。誰かのことを考える……それだけで幸せだった。

これからどんなことがあつても、レオンだけは手放さない。そう決めた。

「レオン、ご飯できたよ！　一緒に食べよう」

私は二人分の食事を持ってリビングに行く。レオンはお利口さんだから、私の後ろでおすわりして待っていた。

「いい子ね、レオン。食べようか」

本当は犬と一緒に食べるのは良くないらしいんだけど、私は気にしない。レオンは一緒に食事することを楽しんでいるみたいだし、だからと言っていう事を聞かなかったり、暴れ回って私を困らせることもない。むしろ大助かりなくらいいい子だ。

「美味しい？　レオン。今日のは特売の鮭なんだよ」

「わんっ！」

「そっかそっか。お魚好きなんだね。じゃあ、今度は違うお魚買ってこようね」

レオンは食事をすっかり平げ、自分のお皿を器用に咥えるとキッチンの流れ台の中に運んだ。

—— 本当、レオンって人間みたい。

教えたわけではない。多分、私がしているの見て真似ているんだと思うけど、そういう時が多々ある。ご近所さんにも「レオンちゃんは本当にお利口さんねえ」と言われるほどだ。

食事の後、私はソファでくつろいだ。その隣にはもちろん、レオンがいる。一緒に映画を見ながら、二人で戯れ合う。

「レオンは本当にふさふさで綺麗な毛並みだね。ついギュッてしたくなっちゃう」
ぎゅっとレオンを抱きしめる。レオンは嬉しそうに私の顔を舐めた。

レオンという名前は、引き取る時に決めた名前だ。なんとなく、その名が頭に浮かんだ。ライオンみたいな見た目で、堂々としていて、びつたりだと思った。

ふと、テレビの画面を見る。今見ている映画は男女の恋愛ものだ。たまたま目について見えているんだけど、見ているとなんだか虚しくなってきた。

私には彼氏がない。好きな人がいた時もあつたけど、丁度その時両親が亡くなって、気持ちに余裕がなくなつて離れてしまった。

いつかは誰かと巡り会えると思うけど、こんなドラマチックな恋愛はできないだろうなあ。

「レオンはお嫁さん欲しい？ 一人だつたら寂しくない？」

「くうん」

レオンはぶるぶると顔を横に振る。

「そう……私はどうなるんだろうなあ。この俳優さんみたいにイケメンで素敵な人がいたらいいけど……なかなか現実いないもんね。出会えないし」

「わんっ」

レオンが私の膝の上でゴロゴロし始める。甘えている時の仕草だ。

「なあに？　僕がいるよって？　そうだね。レオンがいるもんね。いつそ、レオンが恋人だったらいいのになあ」

「わんっ！　わんっ！」

そうだそうだ！　って言ってるみたいだ。私はクスツと笑ってレオンに鼻でキスをした。

その日の夜、私はいつもより少しだけ遅めに就寝した。

ベッドの横にはレオンの寝床がある。二人で一緒に眠っていた時だった。

すっかり寝入っていた私は何かの匂いを感じたけど、起きることはしなかった。

レオンがバタバタと動き始めて、ワンワン吠え出す。ようやく眠い目を開ける。

「んん……レオン……？　一体どうしたの……？」

——　え？　なんか変な匂いがする……？

起きて一番最初に感じたのは、嗅いだことのない匂いだった。それと、妙な音。バチバチとまるで何かが燃えてるみたいな音だ。

レオンは怒ったみたいにワンワン吠え続けている。

私はおかしいと感じて一階に降りた。けど、そこで見たのは茫々と燃える我が家の床だった。

「きゃああああああっ」

——　どうして!?　なんで燃えてるの!?

突然火が見えて、私は混乱した。ガスの元栓はきちんと閉めたはずなのに！

レオンがぐいっと私を引っ張る。こつちだと案内しているようだった。だけど、別の方向にも火が上がっていた。一階の出入り口は全て燃えている。

まさか、放火だろうか。分からない。そんな事を考える余裕もない。

窓はあるが、こういう時迂闊に開けると余計に火が大きくなると聞いたことがある。私はレオンを連れて一旦二階に避難した。

「レオン……ごほつ、だ、大丈夫……!?」

「くうーん……」

「待ってね、すぐに消防車を呼ぶから」

私はスマホを取り出し、すぐに消防署に連絡した。ただどこに到着するまで、持ち堪えられるかどうか……火は着実に二階に迫りつつある。

「ごほつごほつ……っ……っ……レオン、伏せして……っ」

私は布団の上に置いていたタオルをレオンの口の周りに軽く被せ、匍匐前進のよ
うな格好をした。けれど、煙は徐々に上に上がってくる。見る間に二階の天井が
白い煙で覆われた。

——どうしよう！ このままじゃ一酸化炭素中毒になっちゃう……っ。

息が苦しい。なんだか頭がクラクラする。本当に死んでしまうかもしれないという恐怖が襲った。

私はこのままここで死んでしまうのだろうか。やっと人生楽しくなってきたと思ったのに——。

「わんっ！」

私の目を覚まさせるようにレオンが吠える。でももう、難しかった。

——ごめんね。レオン……助けてあげられなくて……。

そこで私の意識は途絶えた。

ああ、まだ二十代だったのにこんなところで死ぬなんて、しかも火事。

家の処理はどうなるんだろう？ 会社の人への報告は？ もしかしてニュースになつてたりして……。

ふと、声が聞こえた。人の声だ。なんだか周りがざわざわし始める。

「ああ、ついに我が国にも異邦人様がやってきたんだ！ これでようやく呪いから解放されるぞ！」

「しかし、不思議な見た目だな。耳も尻尾もついていないぞ。どうなっているんだ？」

——誰？ ここは私の家、つて……。あれ？ 苦しくない？ もしかして私助けられた？ 消防署の人が来てくれたの？

「しかし、異邦人様が協力してくれるだろうか。我々とは種族が違うのだぞ」

「何を言っているの。そのために殿下がわざわざ探しに行かれたんじゃない。きつと聞いてくださるはずよ」

——うーん、なんか変な言葉遣い。消防士さんは何を話しているんだろう。
う。異邦人って何？ 殿下って……。

「シオリ、起きてくれ」

誰かがトントン、と肩を叩く。私はそこでようやく目を開けた。

「ん……」

目を開ける。周りには私を取り囲む消防署の人と近所の人達——ではない。

えっ——!?

私は思わず目を見開いた。そこにいたのは見たことのない格好の人々。いや、違う。人のような格好をしているが、皆耳がある。耳といっても、人間の耳ではな

い。まるで犬のようにふさふさで、毛に覆われた耳。しかも、毛は耳だけでなく顔全体。いや、手も、首も、足も、毛に覆われている。二足歩行の犬みたいだ。皆黒や赤毛、白毛、いろんな色をしている。まるで、漫画で見る獣人みたいだ。

「おおつ、異邦人様がお目覚めになられたぞ！」

わつと周りにいた人達が湧く。私は一人混乱した。

—— え？ ここどこ……？ 家は？ 消防士さんは？ 火事は？

あたりを見回すけど、どうもここは私の家の近所ではない。というか、建物の中だ。まるで海外の教会みたいに綺麗なステンドグラスに覆われた壁。背の高い天井。そして、周りを囲む明らかに人間ではない彼ら。

映画の撮影か何かだろうか。そんなわけがない。さつきまで火事の現場にいたのに。

—— そういえば、レオン！ レオンがいないっ！

私は慌てて周りを見回し、周囲の人に尋ねた。

「レオン！ レオンは……あ、あの！ 大きな犬を見かけませんでしたかっ、青色の首輪をして、クリーム色の可愛い犬です。耳は垂れ耳で——」

もしかして、あの火事で死んでしまったの……？ 嫌な想像をして、泣きそうになる。

「シオリ、ここにいるよ」

「え？」

突然名前を呼ばれ、振り返る。そこには他の人々と同じようにまるで犬みたいな見た目をした人物がいた。クリーム色の毛。大きく垂れた耳。どこことなくレオンに似ているようにも見える。けれど貴族みたいな服を着ているし、なんだか品がある。

「どうして私の名前……？」

「レオンは私だ」

「……え？」

思わず耳を疑った。この人はなんていったの？ 自分がレオンだって？

「え、あの……冗談か何かですか。というかここはどこですか？ 私さっきまで家の中にいたんです。でも火事にあつて、それで……」

「……ここはもう君の家じゃないんだ。混乱しているだろう。順を追って話すから、こちらへ」

レオンが手をやると、周りいた人達が波を割ったようにざつと避けた。

——どうしよう。ついて行つていいのかな。でも、ここは私の家じゃないし、家に戻るなら話を聞いた方がいいのかもしれない……。

私は渋々納得して、レオンと名乗る人物の後に続いた。

レオンは教会のような場所から出た。なんだかどこかのお城みたいに豪華な場所だ。廊下はどこまでも長く、赤絨毯が敷いてあつて、大きな柱が並び、そしてその外には広い庭園が広がっていた。

——え……!? ここどこ!? さっきも思つたけれど、明らかに日本じゃない雰囲気だ。まるでヴェルサイユのお城の中にいるみたい。

廊下の端には等間隔に犬の頭の石像が並んでいる。西洋のお城、そんな雰囲気だ。

私がキョロキョロあたりを見ている間に、レオンと名乗る人物はある扉の前にたどり着いた。大きな二枚扉の部屋だ。扉を開け、その中に入る。

そこは廊下より豪華な部屋だった。雰囲気的には、執務室……といったところだろうか。これまた日本らしくない雰囲気だ。

「掛けてくれ」

ソファに案内される。私は言われた通り、横長のソファに腰掛けた。レオンと名乗る人物は私の目の前に座る。

「さてと、いろいろ話さなければならぬことが多いが……」

「あの、ここはどこなんですか？ 私救急車で運ばれたんですか？」

「ここは……君がいた場所ではない。世界が違う。異次元と呼ばれる場所だ」

異次元？ 世界が違う？

頭に疑問符を浮かべる私に、目の前の獣人は続ける。

「あの夜、家に放火犯が火をつけた。それで君は助けを呼ぼうとして……」

「放火犯……つやつぱり、あれは誰かがやったんですね!？」

「すまない……私が気付いた時にはすでに犯人は逃走していた。おまけに火の回りが早かった。油の匂いがしたから、何かしら撒かれていたんだろう。木造の家だったから余計にだ」

——私が気付いた時には？　じゃあ、家にこの人がいた？

そんなわけない。家には私とレオンだった。他にいたとしたらその放火犯——

。

目の前の人物を見て、一瞬嫌な想像をする。まさか、この人が本当は犯人……？

ううん、馬鹿な考えはよそう。というか、こんな人いるわけない。

異次元とか世界が違うとか、話もまるで理解できない。ゲームの中の話みたいだ。

「私はなんとかしようとしたが、あの場では何もできなかった。それでやむなく魔法を使ってこの世界に君を——」

「ま——待ってください！　魔法？　何いつてるんですか。そんなもの、あるわけないじゃないですか……さつきからなんなんですか。私をからかつてるんですか」

あまりにも理解できないことばかり言われて私の頭はパニックになっていた。そんな私を見て、彼は申し訳なさそうに頭を垂れる。

「……すまない。突然こんな場所に連れてこられて混乱しているのは分かる。だが、君に危害をくわようとしたわけではないんだ。信じてくれ……」

——あ、この姿どこかで見たような……。

そうだ、と思い出す。レオンが悪いことをした時、落ち込んでいる時の姿にそっくりなんだ。

レオン……あの火事でどうなったんだろう。まさかあの中で焼けてしまったんだろうか。私一人だけ助かって……。

ぼろぼろと涙が溢れる。レオンはたった一人の家族だったのに、それすら失ってしまふなんて。

「レオン……っう……」

「な、泣かないでくれ。すまない。君を悲しませるつもりはなかったんだ」

「たった一人の家族だったのに……レオンがいなくなったら、私またひとりぼっちなのに……っ！」

「レオンは私だ。死んでいないよ」

「え……？」

「……この姿では信じてもらえなさそうだ」

彼は立ち上がると右腕を胸の前にやった。すると、袖からちらりと青い腕輪のようなものが見えた。

—— あ、あれ……っレオンの首輪！

ピカッと目の前が眩く光った。一瞬目を閉じる。落ち着いた頃に再び開けると、さっきまでソファに座っていた獣人が消えて、愛犬レオンが現れた。

「……レオン！」

私はいつもの癖で両手を広げた。だけど、レオンは飛びついて来ず、じっと私を見ている。

「レオン、どうしたの？ おいで。私、紫織だよ。もしかして怪我をしたの？」
私が話しかけると、レオンがまたピカツと光る。すると、またあの獣人が現れた。

「え……」

「分かったか？」

「え……なんでレオンが、え、え……？」

「レオンは私だ。君がいた世界では、犬の姿に変身していたんだ」

ようやく、頭の中でピースが繋がる。

レオンがこの獣人。理解できなかったけれど、確かに見た目はよく似ている。手首につけている腕輪も、レオンがつけていた首輪と同じだ。耳も、ふさふさのしっぽも。毛の色も。

「本当に……レオン、なの……？」

「そうだ」

「ど……どういうことですか……？ どうしてレオンが……？ なんでこんなことに……」

「それも、説明しよう。そろそろ落ち着いた頃か……シオリ、疲れていないか」

「え？ あ……」

そういえば、火事の際は寝ている途中だったからパジャマを着たままだ。おまけに煤で汚れている。言われると、どつと疲れが押し寄せてきた。

「部屋を用意しよう。ゆつくり休んでくれ」

「あの、でも……」

「明日になったらきちんと説明する。大丈夫だ。君のことを裏切るような真似はしない」

レオンは穏やかに笑みを浮かべた。

——本当に……彼が、レオンなんだ。

明らかに空想じみている話なのに、なぜだか信じてしまいそうになる。彼がレオンだからだろうか。

その後、レオンは私とある部屋に案内した。お姫様でも住みそうな豪華絢爛な部屋は、三つ星ホテルのスイートルーム並みに広く、調度品全てが豪華だった。

なんだか落ち着かないけれど、こんな時でもはしゃいでしまうあたり、私も女の子なんだと思う。

少しすると、部屋の扉がノックされた。返事すると、さつき見たような小柄な獣人が入ってきた。メイド服みたいな格好をしているから、きつと女性……いや、雌だ。なんだかチワワを彷彿とさせる顔をしている。

「異邦人様のお世話をさせていただきます、チロルでございます」

可愛い名前……。チロルといいレオンといい、あそこにいた獣人達は皆なんとなく同じ種族に思える。多分みんな、犬っぽいからだ。

私がぼうつとしていると、チロルは慌てて部屋を整え始めた。

「はっ、私としたことが！ 異邦人様、何か必要なものはございますか？ ここは異邦人様がいた世界とは違いますでしょうから、不便かと存じます。できる限り対応させていただきますので遠慮なく」

「あ、あの。異邦人様って……？」

「貴方様のことでございますが？」

チロルはキョトン、と首を傾げた。

「私の名前は伊藤紫織です。その、異邦人様というのは、ちょっと」

「ですが、異邦人様は異邦人様でございます。そう呼ぶならわしでして……」

「どうして異邦人なんですか？ 別の……世界から来たから？」

「作用でございます。ここ、スエルカリブでは異界から来た別の種族の方々を異邦人としておもてなしするならわしなのです」

——スエルカリブ。この場所の名前。やつぱりここは日本じゃないんだ。チロルを見て、改めてそう感じた。

「チロルさん、少し聞きたいんですが……」

「そんなそんなっ！ 異邦人様が私に敬語を使われるなど！ どうぞ気安く話してくださいませ！」

「え、ええと……じゃあ、チロル。聞いていい？」

「はい、なんなりと」

「ここは、スエルカリブって言ったよね？　ここは……なんなの？　私とは違う見た目の人たちがいっぱいいたけど……」

「スエルカリブは犬族の獣人が治める国でございます。国王陛下と王妃殿下、そして我が主人レオン殿下が王家を率いております。獣人も色々おまして、我々は犬の――」

「――え……？　レオン殿下って……」

「次期国王のレオン殿下でございますっ！」

ふんす！　とチロルが鼻息荒くする。

――待つて、ますます分からない。レオンが王子？　いや、別のレオンかもしれない。

ややこしい話ばかりで混乱する。私は一体、どこに来てしまったんだろう。やっぱりここはあの世なんだろうか。

「ああつ、混乱させて申し訳ありません！ 明日国王陛下と大神官様からお話があると思いますので、それまではどうぞごゆっくりなさってください！」

「国王陛下……？ つて、この国の王様……？」

もうだめだ……全然ついていけない。

私は頭がパンクしそうになって、もうこれ以上は聞かないことにした。

そして一夜が明けた。

翌日、再びチロルがやって来て、私の身の回りの世話をしてくれた。食事の用意からお風呂の手伝い、ドレスの着付けまで。まるで王族ばりの待遇に、慣れない私は恥ずかしくて気が休まらない。どうやらここは、やっぱりしなくてもお城らしい。

そして、チロルと共に王様と大神官様が待つという王宮の教会に向かった。訪れたのは昨日いた場所。私が目覚めた時にいたあの部屋だ。

「ここからはお一人をお願いします」

教会の前でそう言われ、体が緊張で固くなる。意を決して扉を開けた。

——あ、レオン……。

教会の奥にはレオンがいた。そして、レオンによく似た、王様っぽい格好をした獣人と王妃様っぽいドレスを着た獣人、神官っぽい格好をした獣人。

どうしよう。王様ならきちんと挨拶すべきだね？ でもここは日本じゃないし、お辞儀で通用するのかな……。無礼者！ って言われたらどうしよう。

などと私が心配していると、向こうから立ち上がった。

「おお、異邦人殿……！ 遠いところからよく来てくださった！」

王様は両手を広げ、尻尾を振っている。

——あれ？ 歓迎されてる？ なんで？

そういえば、最初獣人に囲まれた時もなんだか歓迎されてるっぽかった。なんだろう？ レオンの飼主だから？

「あ……えと、私は伊藤紫織といいます。その、こんにちは……」

「そう固くならずともよい。異邦人はこの国にとって救世主なのだ。楽にしてくれ」

「救世主？」

どういうことだろう？ 私何か助けたかな？

「父上、シオリは何も知らないのです。説明しなければ」とレオンが横から言う。

「おお、そうだったな。では、大神官殿、お願いできるか」

「はい」

神官の格好をした獣人の男性が一步近づく。なんとなく、ボルゾイのような見た目だ。白く長い毛がなんだか神々しい。

「ここ、スエルカリブは獣人が治める国でございます……異邦人様の世界には、獣人はいないと伺いました。さぞや驚かれたことでしょう」

「いえ……」

「ここには人間もおりますが、ごくごく少数です。基本的に獣人のみで構成された世界なのです。そして、我が国の他にも獣人が治める国が多数ございます。しかしながらこの度、世界で大変な事態が起きたのです」

大神官様は重い表情で肩を落とした。

「魔女によって、大陸全土に呪いがかけられたのです」

「呪い……？」

「獣人同士では子が出来ぬという呪いです」

四人の重い顔。深いため息。多分これは彼らにとって重大な問題なんだろう。獣人だし、半分動物だと考えるなら、子供を残していく本能があるはずだ。

「我々獣人は、基本的に同種族のものとしか交わりません。ですから他国と交わることは基本的にないのです。他国もそれは同じ。子が出来ぬということは、国の終わりを意味します」

「そんな……」

「しかし過去にもそういった非常事態がありました。私は古い記録から異邦人の存在を知り、その方に助けを求めようと提案したのです」

私は自分を指さす。大神官様は頷いた。

「異邦人様をお呼びするには我々が異世界へ行かねばならない。そこで、国の一大事だからとレオン殿下が自ら名乗りをあげてくださいました」

「そうだ。私は魔法陣で異世界……シオリが暮らしていた世界に飛んだ。獣人であることがバレないように犬の姿に変身して、我々の国を助けてくれそうな異邦人を探したんだ。そんな時、シオリに助けられた」

——あ。

レオンと初めて出会った時のことを思い出す。レオンは傷だらけで道に倒れていた。もしかしてあの時、日本に来たばかりだったのかな。

「慣れない世界で色々危ない目に遭った。怪我をして、もうここで死ぬかもしれないと思った時に……シオリが助けてくれたのだ」

「レオン……」

「シオリはみず知らずの私を助けてくれた。そばに置いて、食事を与え、介抱してくれた。異世界で心細かった私に、それがどれだけ嬉しかったことか。私は、シオリならば我が国を助けてくれるかもしれないと思った」

でも……レオンは数年間の間一緒にいた。私にそんなことを言い出すことは一度もなかった。だから私はずっと犬と一緒に生活しているんだとばかり思っていたのに。

「……すまない。君は両親を失い、失意の中生活していた。苦勞をしている君に、そんなことを言い出せなかったんだ。私自身、シオリとの生活が気に入っていた

のもある。ずるずる生活していた時にあの放火が起こり、私はシオリを助けるためにやむなくこの国に連れてきた。勝手な真似をしてすまなかった」

そんな経緯があつたなんて……。

じゃあレオンがあそこに倒れていたのは異邦人を探していたからなんだ。まさか拾った犬が獣人の王子様だったなんて、なんだか驚きばかりだ。

「わ、わかりました。でも、異邦人って何をするんですか？ 私ただの人間ですし、魔法は使えませんけど……」

「異邦人様には、獣人の子を産んでいただきたいのだ」

——え？

聞き慣れない発言に一瞬耳がおかしくなったのかと思った。獣人の子？ なん
で？

「先ほど申し上げた通り、我々は同族同士では交わっても子が生まれない。すでに試した結果だ」

「ま……待つてください！ 子供って、その……突然言われても困ります！」

犬は好きだけど、突然獣人の子を産めなんて。いくらなんでも無茶苦茶すぎる。

「もちろん、無理を承知で頼んでいる。しかし我々にはそなたしか継るものがないのだ」

くうくと聞こえて来そうな目を向けられて、一瞬たじろぐ。

だ、ダメダメっ！ 犬は可愛いけど！ 可愛いけど！ 突然そんなことできないよ！

「で、でも……私、いつぱいの相手とか、無理です……それに、子供だって好きな人との子供じゃないと……」

「いっぱい？ いやいや、そなたの相手は一人だけだ」と、混乱する私に王様が言う。

「え？」

「ここにいるレオンが、そなたの夫となろう」

レオンが、私の夫？

「わざわざ異世界から来てくださった上、子まで産んでいただくのだ。勿論最高の待遇でお迎えしようと考えている。レオンはこう見えてかなり選り好みが激しくてな。相手を選ぶのに難儀していたのだ。レオンの妃として、どうだね？ 次期国王だ。器量も悪くない。そなたの相手としては十分ふさわしいと思う」

「えっ、妃……つて、え……？」

「駄目かね？」

私、ごくごく一般庶民だったんですけど……。

「そ、その……私庶民ですから、妃なんて務まりません。国のみなさんも納得しないかと思います」

「それはない。すでに国民には承諾を得ておる」

「で、でも。人間の血が王族に混じるのは、よくないんじゃないんですか？」

「我々は獣人だ。古い祖先は人間と獣が交わったもの。そのような考え方はない」

「……どうしよう、断る方法がない。」

レオンは私を助けるためにここに連れて来たみたいだけど、私は突然だし、いきなり子供を産めと言われるても正直困る。勿論助けてあげたい気持ちがないわけじゃないけど……。

「——陛下、事態が火急であることは承知しておりますが、今しばらくお時間をいただけないでしょうか」

突然、レオンが話を割る。

「突然異世界に連れて来られれば誰だって驚くのは当然です。私もシオリのいた世界では大変な思いをいたしました。シオリは私の恩人。加えてこの国にとってなくてはならない人物です。どうかご配慮を」

頭を下げるレオンに、王様と王妃様はうんうん頷いた。

「分かった。お前の申す通りだな。シオリ殿、突然あれこれと申してすまなかつた。ただ、今の話について少し考えていただけると有り難い。我が国にとつては死活問題なのだ」

「はい……」

話が終わり、私はレオンと共に教会の外に出た。

なんだか気まずい。ずっと一緒に暮らしていたのに、突然子供がどうか言われたからだろうか。

「こんなことに巻き込んで……悪かった」

「え？ あ……気にしないでください。仕方ないことですし……」

「気楽に話してくれ。俺はお前と一緒にいたレオンのままだ。気を使われると、かえって申し訳ない」

「でも、レオンは……王子様なんでしょう？ そんな人に気さくに話すのは……」
「構わない。シオリは異邦人だ。異邦人はこの国では尊ばれる存在だ。誰も気にしない」

「そう言われても気になるものは気になる。ついこの間までは可愛いわんこだったのに、突然王子様になったのだから。」

それにしても、さっきの話は本当だろうか。魔女とか呪いとか。ファンタジミみたいな内容でいまいち実感がわかない。

「あの、レオン。さっきの話だけど……その、魔女を倒すとかして、呪いを解くことはできないの？ いろんな国の人が困ってるんでしょう？」

「魔女というのは、シオリの世界でいうところの神のような存在なんだ。あらゆる元素を支配する、生物の生みの親。元々はこの世界にいた人間の一人だったそうなんだが——。なにせ、今世界の人口のほとんどを獣人で占めている。そのような状況をよく思っていないのだろう」

「じゃあ、私みたいな人間が現れたら魔女さんに怒られない？」

「実というところ、こういうことは昔から度々起こっているんだ。それも何度も。魔女はある意味、世界の均衡を保とうとしているのだろう。だがそのままだと獣人達も困るから、古来より異邦人に助けを借りていたんだ」

「そっか……じゃあ、倒せばいいとか、そういう問題じゃないんだね」

「シオリのいた世界とは根本が違うんだ。我々獣人は一度に何匹も子供を産む。だから増えやすいのも問題だ」

うーん、外国の一人っ子政策みたいなものかな。でもそう聞くとそこまで切羽詰まった感じはしないけど……。

「……あの、王様の話だけど」

「私の妃になるという話か？」

「本気……？」

「勿論本気だ。呪いのことだけじゃない。シオリだからそうしたいと思ったんだ」

「でも……結婚は好きな人とした方が……もちろん王子様だから難しいのかもしれないけど……」

「……私が恋人だったらと、そう言っていた」

「え……？」

「テレビを見ていた時、シオリは画面の中に映っている男女を見て羨ましがっていただろう。私は……ずっと、シオリだったらいいと、思っていた」

言われ慣れない言葉に顔が熱くなる。告白されているんだろうか。なんだかドキドキして、落ち着かない。

——待つて、レオンは私の家族だよ？ いきなり告白なんかされなくても付き合えないし、つていうか子供産むつて……それ以前の問題だよ。

「……レオンのことは好きだよ。でも、その……突然すぎて、どう答えたらいいか……」

「……それは、獣人ではお前の夫に相應しくないということか」

レオンが悲しそうな顔をする。その顔は愛犬レオンの落ち込む姿そのものだ。

「そういうわけじゃ……」

「陛下からは承諾を得た。私はシオリがいいというまで待つつもりだ。私とのことも、どうか真剣に考えてもらえないか」

真剣な目で見つめられれば、ノーとは言えない。

なんだか丸め込まれている気分にもなるけれど、レオンは大切な家族。無下にはできない。おまけに命を救われたわけだし、困っているのだから。

結婚とか子供云々はともかく……とりあえず、まずは考えてみようか。

「分かった。レオンの頼みだからなるべく聞いてあげたいけど……少し考えさせて」

「ありがとう、シオリ」

4

私はスエルカリブの王宮に身を寄せることになった。なんでも、異邦人の保護は王族の役目らしい。そういうわけで、私は来た時使っていた部屋を与えられた。

——うーん、なんて自堕落なの。